

## L14b 多地点同時観測による2001年しし座流星群永続痕の三次元形状解析

矢動丸 泰(みさと天文台)、前田幸治(宮崎大工)、山本真行(高知工科大)、戸田雅之(日本流星研究会)、比嘉義裕(日本流星研究会)、小澤友彦(みさと天文台)、渡部潤一(国立天文台)

2001年のしし座流星群は、日本でZHRが約4500と言われるほどの出現があった(Ogawa and Uchiyama 2001)。極大が予想された11月18日の晩、みさと天文台で取得したデータに数多くの流星が確認され、そこから流星群の活動傾向などを導き出すことが出来た(Yadoumaru et al. 2003)。

流星だけでなく流星痕も多数出現し、流星痕同時観測キャンペーン事務局では多数の流星痕画像および情報を収集するに至っている(Higa et al. 2004)。2001年の流星群において、流星痕の多地点同時観測が報告された41例については、観測者分布の関係から東日本に集中しており、西日本上空の同時観測流星痕はこれまで1例のみであった。

この度、みさと天文台とキャンペーン事務局のデータを照合し、流星および流星痕の多地点同時観測結果を2例を確認するに至った。観測地点は、和歌山県美里町と宮崎県都農町である。これらについてYamamoto et al. (2003)によって確立された手法を用いて流星痕三次元形状の解析を行った。

本講演では、西日本で新たに確認されたこの2例(19日午前1時16分18秒出現、9分継続と19日午前3時43分59秒出現 16分継続)の流星痕について得られた高度や風向・風速の結果を報告する。